

# 坂の上の楓たち

## (その3)



 市川二中同窓会  
再発足20周年記念誌  
2017

### その3の目次

\* 会報 6号から10号の抜粋:

2002年から2008年の概略(下段)

\* 寄稿: 49期 鬼原正臣 同窓会活動に参加しよう

\* 寄稿: 恩師 佐藤(在原)千寿子 二中の思い出

\* 同窓会で海外旅行:

国の江南地区に海外出張中の桑村初代会長を訪ねて

\* 須和田祭でアンケート

\* 同窓会再発足10年



### \* 須和田遺跡

・ 二中時代のあんな事、こんな事

・ (無題)

・ 同窓会? これでもいいのだ!

・ ゴーゴー大会

・ 市川二中の思い出

・ 中三修学旅行日記

・ 市川二中同窓会再発足二十周年を迎えて 20期

14期 印出 博美

14期 栗生 明

14期 鈴木 尚賢

14期 吉田 陽子

16期 安藤 達夫

16期 斎藤 康

20期 深川 保典



平成17年度 (役員改選の期)  
定期総会報告



会報9号(2006)より

福引抽選 復活

須和田祭でアンケート



平成17年10月8日(土)須和田祭に同窓会として参加致しました。  
時々小雨の降る中、校庭で行われる「ふれあい広場」の一角に、同窓会コーナーを設置し総会の写真、同窓生名簿の開示アンケートを取る等、同窓会の存在をアピール致しました。  
アンケートの回答は在校生6名、保護者8名、卒業生4名他の総計22名でしたが、同窓会の存在や会報を知らないうちにアンケートを頂戴した方もありました。  
又、気軽に立ち寄り寄られ、談笑しながら友人や知人の情報が得られ住所不明者6名が判明したのも、大きな収穫です。今後は、楽しい企画の一考が必要のようです。  
次回は是非お立ち寄り下さい。

再発足10年

我が母校二中同窓会は、会員諸氏の熱心なボランティア活動により、年々充実して来ましたが、再発足以来、早くも10年目を迎えます。毎年6月の総会を中心として、学校行事に参加する機会も増えております。18年度の活動・活躍の場を写真に集めました。



会報10号(2007)より

名中、物故者を含めた所在判明者は、5,351名で判明率は31.6%であった(なお、2015年度の会員総数は19,607名で判明率は52.1%)。講演II桑村益夫(二期)「中国事情あれこれ」

06(H18)年6月18日 再発足第9回総会 開催

この年の総会で、篠崎会長は今年の活動目標として①母校・PTAとの関係の一層の強化、②会員名簿の確認を中心とする内部管理の充実、③役員への若手人材の起用、を強調している。その一環として、この年より「須和田祭」への積極参加の方針が決議されている。また「個人情報保護法」が施行されたもとの、同窓会としての同法への対応として「個人情報保護に関する細則」を決定している。

07(H19)年6月24日 再発足第10回総会 開催

(会長・篠崎實 副会長・三村武教・松村恒夫・柿本正子・鈴木尚賢・安藤達夫

会計・加藤重夫・井料京子・松田恵子 右記以外の理事14名を選出 会計監査・岸田弘・吉田和雄  
再発足10周年総会には市川ケーブルテレビ(当時)が取材に訪れ、後日放映された。  
同窓会から「10周年記念」として母校に記念品(展示用パネルボード2枚)と感謝状が贈られている。また、同窓会活動の功労者10名に感謝状が贈られた。活動内容の広がりに対する体制として、5委員会を設置(情報管理・名簿調査・会報・総務企画・広報)し、それぞれの委員長として5人の副会長体制になった。2005年より実施してきた「卒業証書用筒」を学校からの要請に基づき、二つ折れの「証書ホルダー」に切り替えた。

また、前年度方針に基づいて二中オーブンスクール・須和田祭・二中ブロックコミュニティ委員会や学習支援クラブなどへの積極参加を方針化した。  
『会報10号』より12ページ建てとなり、さらに充実した誌面構成となった。  
講演II丸岡乙彦(14期)「お香の蘊蓄」

08(H20)年6月15日 再発足第11回総会 開催  
総会会場において「懐かしの二中展」を開催した。



## 須和田遺跡

「須和田遺跡は、真間の台地から約700メートルほど東にのびる須和田台地のほぼ中央部を占めています。

この遺跡の発掘調査は、杉原荘介氏によって昭和8年から10年まで続けられ、18年には忠霊殿の建設による太鼓塚の削平と付近の調査。26年に明治大学による市立第二中学校校庭の発掘調査、28年には早稲田大学の滝口宏氏による忠霊殿南側の発掘調査が行なわれました。

その結果、弥生時代中期から平安時代初期（西暦前100年～西暦9世紀頃）に至る集落遺跡であることが分かりました。」

※右の解説板より



## 二中時代のあんな事、こんな事

### 14期 印出 博美

卒業後五十三年以上も経つと記憶も断片的になってしまったのが実情ですが、他の方の記憶と突き合わせたら色々と分かってくると思います。

私が入学した一九六一一年は急激に増えた生徒（卒業時四六五名）に教室が対応できず最初の一か月ほどは早番、遅番の二部授業でした。やっと入れた教室は理科の実験室で、水道の流しと実験台が一体化した物が六基位に机を入れた大変広い教室でした。冬になると寒さは尋常でなくてダルマストーブに定量配布のコークスは昼過ぎには燃え尽きてしまいます。寒がる女子を見かねたある男子が秘密裏に調達してきました。後で発覚して大目玉を食らったその人は、とてもフェミニストだったと思います。

部活動を「テニス」と決めて入部したのですが、大谷石のスタンドでの「うさぎ跳び」に終始してなかなか素振りにも進まず、根気と頑張りの足りない私は我慢できずに、少しの間フリーを決め込みました。その間、真間にあった珠算塾に通いました。四級を取った頃プラスバンドに出合い入部。トランペット、コルネットを習いました。でも演奏会などの記憶がありません。きつと才能無し部員だったのではないかと思います。

当時、伯父が英語・中国語の通訳をしていて会うたびに、「英会話」の重要性を教え込まれ実践したかったのですが、なかなかチャンスが無く、ある時市川駅（当時国電）の前で、白人に道を尋ねられて、何とか会話ができた事がとても嬉しかったです。ブロンクンでも良いのだと実感した経験は大きいものでした。

また、この年から吹奏楽部と忠地先生の協力を得て、旧市民会館ホールで校歌と抒情歌の演奏を録音しCD作製を開始した（制作協力金方式で1口500円で1枚贈呈とし、5000枚を作製。翌年にかけて4000枚程度普及し、採算ベースに乗せた）。

『会報11号』より表裏面カラー化を実現した。

講演Ⅱ 武荒信頭（19期）「アートを楽しむ」

※この項は47頁に続く

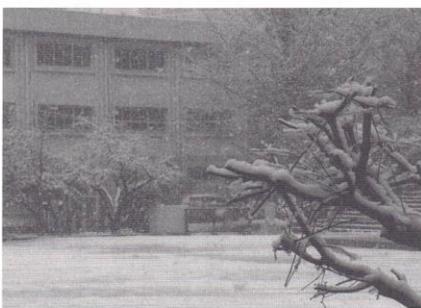
一年の時、二期の中間テストは二〇〇番迄、期末テストでは全員の得点の順位表が職員室の前の廊下に貼り出されました。表の作成は大変でしょうが、あの頃は生徒の競争心を煽り成績向上の手段としていたように見受けられます。私たち団塊の世代は小学校でも、高校でも同様の経験をしていて慣れていました。お蔭で神経が「図太く」なれたのかもしれない。

一年生の家庭科の時間に「ろうけつ染」実習がありました。教科書には蠟を「湯せん」で溶かすとあったのに何故か全員が直火で行っていました。そうしたらあちらで燃えだし、こちらでも発火と大変な騒ぎとなり、幸いにも隣の教室で、職業科の授業中の男子生徒が駆けつけてくれて鎮火しました。大事に至らず良かったです。

二年生から三年生に進級した時のお別れ遠足では十人ほどで「里見公園」やバラが見事な「式場病院」に行きました。式場病院では見事なバラよりも「山下清」のアトリエの方が印象に残っています。そして頭にリボンをつけた高齢のご婦人方が縄跳びに興じていました。高齢の男性は缶詰りに夢中。その光景は「ショック」でした。今でいう認知症なのでしょうか？

あの頃お腹を抱えて大笑いして遊んだ友、先にあの世に逝ってしまった友。懐かしさとともに、わが須和田が丘があります。

雪景色の二中(2013)



鈴木尚賢氏(14期)撮影

もう時効だと思いますが、僕は市川二中同窓会の皆さんにお詫びをしなければならぬことがあります。同期の人たちは知っていることかも知れませんが、僕は市川第二中学校の名譽を著しく傷つけました(当時はそれほどおごごには考えていませんでしたが)。その顛末についてお話しします。

僕が二中の三年生の春だったと思います。三年生の時の担任は、当時新婚ほやほやで熱血漢の国語教師の宮本勉先生。ある時、宮本先生は教員室に僕を呼んで「ラジオにててみないか？」ときりだされました。内容もよく聞かず「はい」と即答しました。素直だったんですね。

皆さんはNHKラジオで「中学生の勉強室」という番組があったことを覚えていますか？ 毎日夕方に、高校受験をめざす中学三年生向けに、英語・数学・国語の授業をする番組です。宮本先生はこの番組のディレクターと知り合ってたんだと思います。その番組に出演する中学生選びを頼まれたのでしょうか。結局、僕と女子中学生のNさんが選ばれました。科目は国語ではなく何故か英語でした。

千代田区内幸町のNHK東京放送会館のスタジオで収録がおこなわれました。収録が始まってすぐに僕は「しまった」と後悔していました。普段から予習というものはせずに、授業中の集中だけでやり過ごしてきた僕は、事前にもらっていたテキストはパラパラと目を通すだけで本番を迎えてしまったわけですね。「それでは栗生君、最初の五行を読んで下さい」と英語の先生(東大の教育学部の教授でした)。僕は自分ではすらすらと読め

たと思いました。

「あっ、そこね、ハッピーじゃなくハピーですね」「それから...」「それとこれも...」と三箇所も発音を直されました、本番中に。次に読んだNさんはネイティブの英語でした。「上手ですね」と先生。そこまではいいんです。よくはないけれど僕はアメリカ人じゃないんだし...と。しかしその後、文法上の質問を受けました。あっさり「わかりません」と答えた時のその場の空気は今も思い出します。スタジオ内が凍りついた。ガラスの向こうで宮本先生の顔がひきつっているのが見えました。

学校の授業では、わからない時はわからないと言い、先生の教えを受けるのがあたりまえだと思っていました。そのための授業なんです。しかし、こうしたラジオ番組では本来、生徒が「わからない」と言っちゃいけない。「質問」と「正解」でキャッチボールする予定調和的な構成が求められていたんですね、当時は。

僕は重大な失敗をしたことをその時気づきました。収録のやり直しかと思っただけれど、そのまま終わってしまいました。英語の先生は「生の授業らしくて良かったよ。でも予習は必要だよ」と言って帰っていかれました。僕は深く後悔しました。しかし、帰りにNHKと金文字が表紙に打たれた大きなアルバムをもらって喜んでいました、子供ですね。

放送は一週間後でした。僕はこの失敗を誰にも知られたくありませんでした、家族にも。当然ですよ、恥ずかしいじゃないですか、市川第二中学校の恥さらし者ですよ。

当日、僕は茶の間のラジオを隠してしまいました。

「ラジオがどこにあるか知らない？」  
母親は家の中を探し回っていました。全国放送で流れる息子の声を聴きたいのはわかります、でも恥ずかしい。

「僕は知らないよ」

結局、ラジオは見つかりませんでした。ほっとしたのは束の間。放送時間に夕食の支度をしている母親のかたわらには、なんと小さな鉱石ラジオが...

「ちゃんと予習していかなかったの？ バカねー」

あれから五十年以上たちました。いまだに英語は苦手です。



## 同窓会？これでいいのだ！

14期 鈴木 尚賢

「そんなむきになるなよ！」

「どうせ会報は捨てられるだけだよ！」

「お前、何が楽しくやってやってんだ？」

「お前もよくやるよな〜！」

同期の仲間からは、こんな話が届く。一生懸命奮闘している役員の中からも、

「頑張っても努力は報われないと思う」

「費用対効果を考えて空しい」

「こんなことやって何の役に立つの？」

などと、同窓会の活動に対して懐疑的な意見をいただくことがしばしばである。

私は、再発足二十周年という記念すべき時に、同窓会について改めて考えてみようと思う。私にとつての同窓会とは、「がむしゃらに人生を過ごしてきたフツと気付き、私の人生は何だったのか？」と自問する時、振り返りたくなるのが「青春時代の自分」だと思う。そして「当時の仲間たちと昔に戻ってみたい」と思った時に、「どうしたら昔の仲間と連絡が取れるだろう？」との疑問にぶつかると。そんな時に、同窓会の存在を知っていたら、きっと力になってくれることだろうと思う。だから、同窓会はその存在や活動について誰にも評価されず、当然ながら見返りなど全く眼中に入らず、それでも、地道に着実に同窓生の居所や動静を掌握して正確なデータを維持・管理していること。同窓生の状況を把握し絶えず知らせて交流する場を提供するとともに同窓会自身の存在や活動を知らせていること。そして何

よりも同窓会自身がたえず楽しい企画を組み実行すること。こうすることで、普段は見向きもされず「何やってんだ」とか「どうせ自己満足だろ」などと言われることがあっても、こういう人たちにもいつか「活動してきてくれて助かった」と言ってもらえる日がきっと来るであろうことを信じて活動を綿々と続けること、そのこと自体が同窓会の本来の姿ではないかと思うのである。

振り返って、二十年前、「市川二中五十年史」の制作に関わった先輩諸氏の尽力で「市川二中同窓会」が再発足した。それから今日まで四代の会長のもと多くの理事・評議委員をはじめ協力者の方々文字通り「地道で着実」かつ「私心なく献身的」な諸活動に裏打ちされて今日の同窓会が作られてきたのである。更に、多くの会員の皆さんの「賛助金」や「募金」に支えられ、活動を広げて今日に至ったのである。

この二十年間には多くの困難があったことと思うが、その都度「侃々諤々」の議論を経て脈々と受け継がれてきた同窓会の活動を、私はこのような思いから受け継ぎ、後輩の皆さんにお渡ししてゆけたらと思うものである。

最近、我が同期生から「でもお前が頑張っているから俺も付き合おうよ」という有難い言葉もいただけるようになった。どんな視点でもよいから、同窓生がこちらを見ていただけよう頑張りたいものである。

思えば、中学校の在学期間は三年間、教職員の方々もせいぜい五、六年、その間精一杯遊び勉強し青春のページを記した生徒も、卒業したら次には高校・大学・就職・子育てなど後ろを振り返る余裕はない。また、恩師の先生方や職員の方皆さんも、在職中は全力で教職に励まれても離任されたら次の職場に全力を尽くさなければならぬ。そういう意味では、市川二

中は人生の通過点でしかない。しかし我が同窓会はどうであろうか。

同窓会は過去から未来にむけて市川二中を見続けるであろう。そして、同窓生・恩師の皆さんとの絆を紡ぎ続けるであろう。同窓会、これでいいのだ。

会報11号(2008)「旅行愛好会・楓会」より



会報15号(2012)「須和田祭・ふれあい広場」より



会報13号(2010)「平成21年度定期総会報告」より



14期 吉田 陽子

私達は団塊の世代と呼ばれ、三年時にも十組、四百名近い生徒数だったと記憶しています。思春期、そして第二反抗期でもある大勢の子ども達の指導に先生方は、さぞご苦労が多かったことと思われまます。

卒業して五十年以上たった今でも思い出すと楽しくもドキドキしてしまう出来事をお話しします。

三年の時の担任は学校で一番厳しいと言われたA先生。生徒指導の担当で、遠くからでも姿が見えただけで背すじがピンと伸びてしまう程でした。

高校受験をひかえた十二月、三学期になれば受験一色の日々、「その前に何か一つ楽しいことを」と考えたのでしょうか。

「クリスマス会をしよう」とクラスで話がまとまり、司会進行はY君達。飾り付けは私達女子、レコード係はM君と、各々係の分担を決め、教室もそれらしい雰囲気になりました。

グループそれぞれの出し物で笑ったり、好きな歌を合唱したりしました。すっかり打ち解けて楽しくなった私達は、最後にその頃流行していた「ゴーゴー」を踊って「お開き」の予定でした。でも、あまりにも楽しく、「あと一曲、あと一曲」と、気がつけば教室の窓の外は真っ暗。冬至近くの夕方六時半すぎだったでしょうか。

大慌てで後片づけをして、脱兎の如く二中の坂を駆け下り、下校しました。

「どうしよう、完全に校則違反だ。あんな時間まで残っていたことが分かったら、クラス全員にカミナリが落ちる」

市川二中の思い出

16期 安藤 達夫

同窓会の歴史で四百五十人以上の卒業生を出している期は、十四期、十六期それに三十一期だけです。前二者は団塊の世代ですね。私もその十六期生の一人です。

私の時期は市外からの寄留組が大変多く、二中は学区外にも大変人気がありました。私の卒業した八千代台小学校からも二十人以上が二中に来ました。卒業生総数が百二十名ですから二割が市川二中に來た勘定です。みんな電車通学でしたから、朝は同期生がたくさん乗ってきました。当時の市川真間駅は上下線のホームが分かれていて、朝は菅野側から降り、帰りは国府台側から乗りました。通学定期が使えたので、帰りはよく京成八幡で下車して神社の境内にあった図書館で本を読んだものです。

通学路は今もあまり変わりませんが、真間川土手の桜がきれいだったこと、大正堂文具店が賑わっていたこと（サービスマンを集めてメンコのように裏返すのが勝ちの遊びをよくやりました）は覚えていいます。また坂の下にパン屋があり、通学途上で昼のパンを買いました。

大谷石のスタンドは半世紀前のままです。われわれが一年生の時は新校舎建設のため二年生が旧体育館をベニヤ板で区切って仮設教室で勉強していました。この年のみ校庭の東半分が使えず、運動会はこのスタンドから応援しました。翌年完成したのが一階に教員室のある現在の鉄筋校舎です。この頃は西北の隅に古い木造平屋建て校舎（ロの字型）があり、一年生はみなそこで勉強しました。もちろん当時は汲み取り式便所。校舎の北

覚悟を決めて登校した月曜日の朝のホームルームの時間でした。教室の前のドアを開けて入って来られたA先生は、なぜかニコニコと笑っているではありませんか。

「君達、土曜日は随分楽しかったようだね。実は、私にも良いことがあってね、子どもが産まれたんだよ。双子の男の子だね」とうれしさを隠し切れない様子。

叱られると思っていた私達は、ホッとするより、なぜか拍子抜けしてしまいました。A先生は、きつとお祝い事に免じて、特別に許して下さいだったのでしよう。

この出来事以降、クラスの雰囲気が一気に和やかになりました。今でもなつかしい二中の思い出です。



裏門

側は一面の畑で、肥溜めもありました。また冬は教室の入口にストーブがあり、燃料は薪ではなくコークスでした。

二年生になって組数が十に増えました。われわれの学年が全組鉄筋校舎に入ったのは三年生の時だけです。ちょうど「東京五輪1964」で、聖火リレーが千葉街道を通るのでみんな応援に行きました。大会期間中授業は午前だけ。午後は教壇にTVを置いてみんなで観戦しました。

授業が終わると掃除の時間で、グループに分かれて教室や側溝、下駄箱周辺などを掃除しました。放課後は部活でしたが、校庭はいつも各部が入り乱れて賑やかでした。ただ冬は風が吹くと砂塵がひどく、われわれが卒業する前にはスプリンクラーが設置されたのを覚えていますが、まだありますか？

次々と懐かしい風景が浮かんできますが、市川二中で学べて本当に良かったと思います。よき師、よき友に恵まれた三年間でした。その思い出があるからでしょうか、同窓会活動にも力が入ります。

改めて市川二中に感謝する次第です。



50年以上前からの安藤氏の所持品

二十周年記念誌原稿執筆に当り、資料を自宅で探したところ  
在校当時の「修学旅行手帳」が見つかりました。そこで、この  
稿は中三(昭和三十九年)当時感じたままを転載し、原稿とし  
ます。

日程：昭和三十九年十一月三十日―十二月三日 宿舎 二条閣

・十一月三十日(月曜日)曇りのち晴

品川駅で「ひので」号※に乗車のあと八時間あまり、何をし  
ようと考えるヒマもなくお菓子屋開く。そしてトランプ・おし  
やべり等して京都市。旅館は今まで見て来たのとだいぶイメー  
ジがちがう。部屋は六帖で、この旅館の中では小さい方らしい  
が、隣の部屋は人数のわりに狭いので、一人当たり一帖もいか  
ない。あと外出やフロへ入ったりトランプをしたりでおやすみ  
なさい。一日目は無事だったがつかれた。

・十二月一日(火曜日)晴

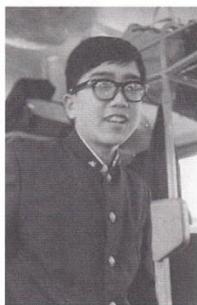
この日は奈良・大阪見物。まず奈良はいかるがの里・法隆寺。  
入ってすぐ五重の塔と金堂があったが、すぐ学校で習った「人  
型割づか」と「正崩しのらんかん」「エンタシス柱」を見たがな  
るほどその通り。五重の塔で説明を聞いていたがそれが失敗の  
もと、みんながパチパチ写しているのに馬鹿なことをしてしま  
った。その失敗だが、法隆寺までで三十六枚、撮り終えるはず  
が撮り終えなかったため、奈良公園でフィルムを変えるときに  
裏ぶたを開けてしまい、真っ黒。それはそれで、夢殿へ。夢殿

金閣寺

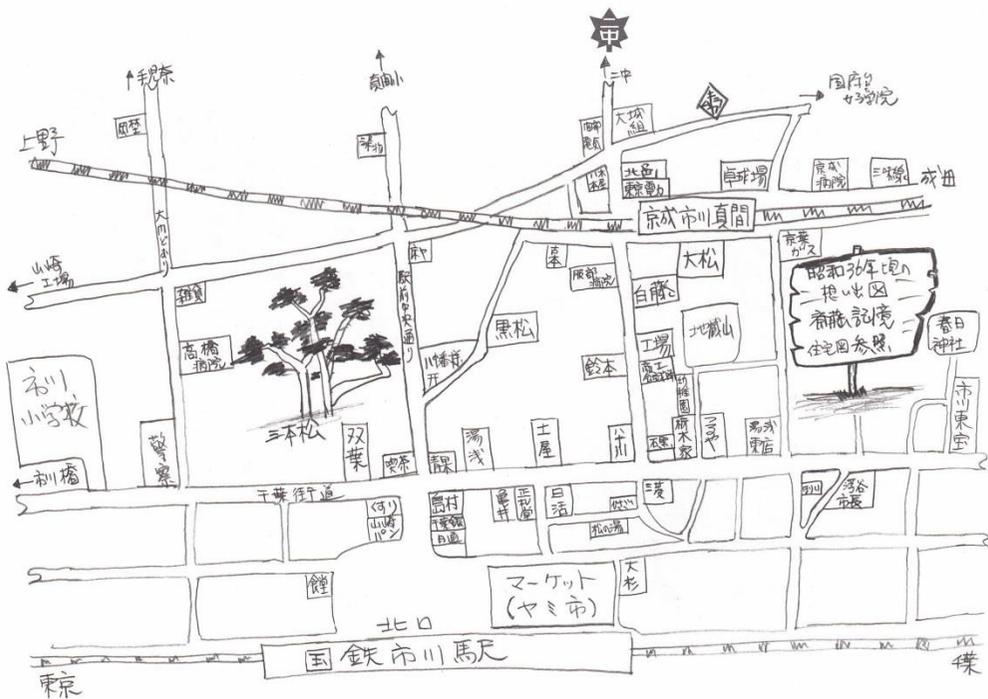


昭和39年12月2日修学旅行にて撮影

初雪で作った団子を片手に山口信光君



ひので号車内にて(私)



からは佐瀬先生の後をつけた。理由は、すぐ隣の中宮寺へ  
行く為の前からの作戦だったが、得をしたと思った。それから  
一路奈良公園へ。着いてすぐに感じたのが鹿の多さに驚いてし  
まった。ここで一番見ごたえのあったのが大仏。最初は遠かつ  
たので、あれだけか? と思ったが近づくにつれ、いい。中  
へ入ったらもっと驚いた。鎌倉の大仏は小つぽけなもんだ。こ  
こでの不思議だったのは、見る場所での大きさの違いだった。  
何故なのかはまだ分からない。それから大阪城だが、この石  
垣の石がまたでかい。畳十八帖敷なんてある。秀吉はえらいも  
んだ。全部で七・八階だったと思うが東京のビルと同じ位の高  
さだった。後は、名神高速道路だが、オリンピックの為の東京  
とは全然ケタ違い。今夜も良く寝ようと思うが寒い。  
・十二月二日(水曜日)晴 ―夜行列車 三日(木)品川到着  
今日で修学旅行も終わり。二条閣の写真を撮る。最初比叡山、  
ここで初雪に会おうとは思わなかった。山口信光君の雪の団子  
の写真はけっこうだ。みんな「ガタガタ」ふるえていて寒かつ  
たらしいが、あまり寒いとは思わなかった。比叡山を下りて、  
金閣寺。建て直したたので、金ピカだから安っぽく思えた。  
次が西芳寺・苔寺、なるほどすごい。  
こけで庭一面が緑色に覆われて、茶  
色なのは人が歩く道だけですごくキ  
レイ。あとは、一つひとつ書いても  
キリが無いからやめる。

※「ひので」号、希望号「修学旅行専用列車」。  
昭和三十四年から昭和四十六年まで運行。  
三人掛席と二人掛席。東海道新幹線利用の  
修学旅行が一般化して運行終了。



品川駅出発風景

「修学旅行手帳」掲載写真

## 市川二中同窓会再発足二十周年を迎えて

20期 深川 保典

私が同窓会の存在を知ったのは桑村益夫初代会長にお声を掛けて頂いた時である。私が四十三歳でちょうど市議をしていたということもあり、二つ返事で理事をお引き受けした。メンバーの殆どが先輩ばかりで少々気も引けたが学ぶつもりで参加させて頂いた。リタイヤされた方が多いとはいえ、さすがにビジネスの第一線で実績を残された諸先輩方は仕事がシステマティックで組織プレーに長けている。二代目会長の故篠崎實さん、三代目会長の三村武教さんも仕事師といったお顔をお持ちの方だった。同窓会とは単なる親睦会ぐらいにしか当初思っていたいなかった。同窓会を変えなければならなかった。こうした責任感、使命感をお持ちの先輩方が支えているのだなと感じた。もちろん女性先輩方の和気あいあいとした雰囲気もなかなか得難いもので、上手く呼吸が合っていたように思える。

特に桑村会長はスーパーマンのような方で、会長でありながら中国で日本の民間企業の新事業を立ち上げその責任者となり、また三村さんが企画した同窓会関係者の中国旅行に現地参加されたり、五周年同窓会総会では二中プラスバンドの一員となりトランペットを演奏されるなど八面六臂の活躍をされさすがに旧同窓会・新同窓会の発起人をされただけのことはあるなどそのバイタリテイに感じ入ったものだ。

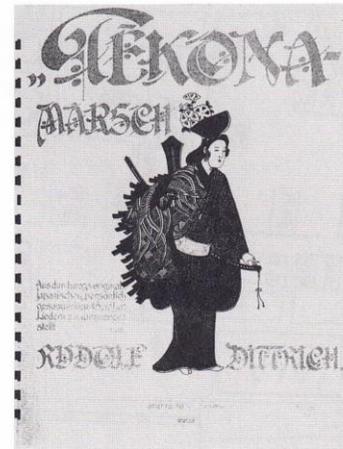
私も現役市議だったので市のマイクロバスを借り有志で筑波山に日帰りバスツアーを企画したり、また同窓会総会では自作詞作曲した『真間の手児奈』をギターの弾き語りでごわせて頂いたこともある。思い出は尽きないが、同窓会に集う皆さん

の「二中愛」は確実に継承されていくものと確信している。私は実は中三の八月に博多から転校して来て、二学期と三学期の半年余りしか二中に在籍していない。しかし娘が二中剣道部で平成十二年の市民大会に出場し団体・個人の部で優勝したこともあり「二中愛」は不滅である。

現在私は、Japanese Frank Sinatra として都内でジャズのライブ活動に精を出している。「よいこ趣味をお持ちですね」と言われることもあるが、大真面目に「人生を賭けています」と言っている。

今人生で一番やりたかったこと、やり残してきたことに懸念に取り組んでいる。二中現役生の青雲の志に負けないくらいの志を持って…。

ルドルフ・ティトリッヒ（『手児奈マーチ』作曲者）  
明治政府がオーストリアから東京音楽学校の教授として初めて招聘した音楽家。1890年頃から6年間日本に滞在した。帰国後、日本の音楽を題材とした数多くの曲を西欧へ紹介し、その一部はプッチーニのオペラ『蝶々夫人』等にも引用された。パイプオルガンとバイオリンの演奏に優れた。



会報18号(2015)「『手児奈マーチ』演奏会」より

